

第2分科会（小説の発見）

「小説の授業をどうする？」

大阪府立島本高等学校 鈴木寿

一 「小説の授業をどうする？」

（「読む」「聞く」「解く」）

1 何を参考にするか？

①指導書（？）

②研究書

③これまでの実践記録

④小中学校の先生の本

⑤受験参考書

⑥その他

□指導書D

- i 難解語句と夏目漱石について調べさせておく。簡単な感想をまとめさせておく。
- ii 夏目漱石の作品を読んだことがあるかどうか、どのような作品を読んだかを、生徒に発表させる。
- iii 夏目漱石について調べてきたことを生徒に発表させる。
- iv 感想を何人かに発表させる。
- v 「こころ」における教科書掲載部分の位置を明確にさせ、教科書本文までのあらすじを把握させる。
- vi 教科書本文までの私・K・奥さん・お嬢さんの間の人間関係がどうなっているのかを理解させる。

3 「読む方法」の基本・応用・逸脱

①授業で小説を読む目的は？

②「小説を読む前に」（資料No.1、No.2）

③「読みと発問のための「指標」」・
「レトリック30早見表」（資料No.3）

2 指導書はどうなっているか？（『こころ』第一時間目）

□指導書A

- i 作者と作品について理解させる。
・夏目漱石およびその作品について知っていることを発表させる。
・作家としての経歴
- ii 「こころ」について知る
・「死」の3年前、「朝日新聞」連載・エゴイズム
- iii 読後感を発表させる。
・あらかじめ全文を読ませておく。
- iv 上・中・下の関わりについて説明し、この作品の構成について理解させる。
- v 「上 先生と私」の「先生」と「私」について理解させる。

□指導書B

- i 作者・作品について
・作家・夏目漱石について、文学史における位置づけを学び、その代表作について学習する。
- ii 教材の概要と構成について
・作品の全体を読んだ上で、思ったこと・考えたことをまとめる。あるいは、あらすじをまとめる。（授業時間内では行えないので、自宅学習の課題とする）

□指導書C

- i 漱石とその作品についての簡単な説明
- ii 「こころ」の全体像を把握し、教科書採録部分がその中でどういう位置にあるかを確認する。
- iii 「省略部分のあらすじ」から、登場人物についてわかることを整理する。
- iv 本文から第一節、第三節を読んで、「K」の告白の内容と、その調子、そしてそれを受けた「私」の心理的動揺を整理して確認する。

4 『こころ』一時間目

「読み方の基本」の確認
(5W1H)・「人物像」・「視点」・「ことば」・「心情」
冒頭からていねいに読む。
作者・作品の詳細については最後に

理由―「それが応用できる読み方だから」

基本（守）・応用（破）・逸脱（離）

※その時だけの特別な読み方で、授業を行わない。
※授業での「読む方法」で、日常の読書をしたくなるような方向付けはできないか。

読みながら、小説の世界をイメージし、文章の特色を
考える。

小説の中の多義的なことば

記述・背景をもとに「確定」

「核」（変容・移動する可能性）のあるあいまいさ

二 意見交換

夏至 げし 時候

梅雨まつただ中の夏至は暦で確かめなければ忘れてしまうほどだが、その日を境に夜の長さは確実に長くなっていく。夏は確実に終わりを向かっているのに、若い心は、光あふれる夏の始まりと真夏へとときめいていく。

あの日もそうだった。

獣の匂いがして梅雨の雨が近づいてきた。野球の練習のない月曜日、彼女とはじめて一緒に帰る日だった。雨が降り出した。二人で駆け込んだ商店街には三波春夫が流れていた。日本で一番長いアーケードには水の匂いが吹き込み人の匂いと串カツとたこ焼き、コーヒートカレーの匂いがどこまでも続いていた。

白いスーツの男がいた。お好み焼き屋のカウンター、パチンコ屋の前、喫茶店の入り口、骨董屋の椅子、……。行く先々で男は私と目を合わせ、満面の笑みを浮かべたり、眉間に皺を寄せたり、悲しそうだったり、わざとらしくくいに表情は大きかった。

アーケードを抜けると雨が上がっていた。「今日は夏至だね」彼女が言った。手に触れた。

私の体のどこかで何か「もの」がうごめいた。もう夏かなと思った。その時ずっと一緒にいた彼女は男に気がついていなかった、と思う。

あの夏至の日の雨上がりから、私の中には「もの」が住みついた。あのころ読んだ「山月記」を身近に感じたのは、自分自身に住みついた「もの」によって変貌して行く実感と得体の知れない不安とを重ねたからではなかったのか。その後、何度もあのアーケードを通ったが、白いスーツの男に出会うことはなかった。

五十歳の誕生日を過ぎ、「もの」のうごめきを感じなくなった私は、白いスーツを着て、日本で一番長いアーケードの中に入っていた。あのころに会える気がした。夏至だから。

夏至今日と思ひつつ書をとちにけり
梅雨ながら且つ夏至ながら暮れてゆく
夢語るむすめの耳かき明日は夏至
夏至近し首里の都のガラス吹く
夏至すでに夜となりたるピカレスク

高浜虚子
相生垣瓜人
森山卓郎
中居由美
内田美紗

小説を読む前に確認しておきたいこと

1 小説Ⅱ「つくりもの」(a) (b) (c)

面白さ・(c)

※小説の中のできごとⅡ小説の中の「本当の話」

2 場面は① (d) (きつかけ) ↓ ② (e) (気持ち・感想・考え)

↓ ③ (f) (会話・表情・しぐさ) という流れで構成される。

3 小説を読む五つのポイント

① 「When・Where・Who・What・Why」
「いつ・どこで・誰が・何を・なぜ」

(g) を常に確認する (日常生活でも重要)

② 文ごとに「誰から(どこから)見ているのか」を検討する

(h)

③ 人物像を小説の展開にあわせてふくらませる (人物像Ⅱ多面的)

④ (i) (j) (k) (l) (m) (n) (o) (p) (q) (r) (s) (t) (u) (v) (w) (x) (y) (z)

(j) (k) (l) (m) (n) (o) (p) (q) (r) (s) (t) (u) (v) (w) (x) (y) (z)

小説の中「で」言葉の意味を考える。対義語から意味を考えてみる。

(意味を「調べる」のではなく・)

「その小説」の面白さ

⑤ 小説には内面(心理的葛藤・心情)は書かれていない

↓ 読者が内面を読む

(k) 描写 ↓ (l) 描写 ☆ ↓ 情景

表情・しぐさ・比喻表現・声の調子
場面が変われば心情も変化している。

小説はいつも (m) である

(n) が完成させる ↓ だから面白い!

注意 冒頭部は、特にていねいに読む。 ↓ 小説の世界へ

「読み」と「発問」のための「指標」78

作者	語り手	視点	視座	注視点	視線
いつ	どこで	だれが	何を	なぜ	どのように
時間の流れ	「く」が「す」になる物語	「く」が「す」になる物語	リストー	ブロッ	登場人物
人物像	場所	場面	表情	仕草	面白さ
違和感	かりか	謎	読者	反復されることば	感化力の差
小道具	文と文の間	リズム	風景描写	心情描写	類義語
構造	形式	象徴	その後	韻律	対義語
共感覚表現	視覚	聴覚	嗅覚	味覚	触覚
出来事	心情	行動	修飾・被修飾	言葉	人物の過去
接続語	助詞	主語	文末表現	伏線	人物の変化
魅力	根拠	具体	抽象	「描写」	擬声語・擬態語
色彩語	会話文	心内語	類比	対比	呼称
時代	常識	文化	経済	政治	共通の思考

共通の指標によって「小説の特徴」を浮かび上がらせる。

アセンブリー資料No.4

こころ

上 先生と私

一

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚かる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といういたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取ったので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病氣だからと断ってあったけれども友達はそれを信じなかった。友達はかねてから国元にいる親たちに勧まない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が気に入らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようかと相談をした。私にはどうしていいかわからなかった。けれども実際彼の母が病氣であるとすれば彼は固より帰るべきではなかった。それで彼はとうとう帰る事になった。せっかく来た私は一人取り残された。

レトリック300早見表

(瀬戸賢「日本語のレトリック」より)

隠喩	擬人法	くびき法	提喻	緩叙法	同語反復法	婉曲法	修辭的疑問法	反復法	省略法	倒置法	声喩	逆説法	反語法	パロディ
彼は米の穂だ。	母なる大地	バツターも無いがジャッキーも無い。	熱がある。	ちよとらしい。	殺人は殺人だ。	化装屋	いつたてい願の余地はあるものか。	えんやとつてえんやとつて	それはそれは	うまいねえ、この「ビー」は	かつぱつぱつした一髪青筋、髪	アキレスは亀を追い抜くことはできない。	(0点に対し)ほんといい点数だねえ	サララ記念日・カラ記念日
直喩	共感覚法	換喩	誇張法	曲言法	撞着法	逆言法	含意法	挿入法	黙説法	対句法	漸層法	諷喩	引喩	文体模写
それはスッポンのようだ。	暖かい色、黄色い声	顔が青える	重さの心算	重さの心算	公然の秘密	お礼の言葉はあつません	袖をぬす。	文は人なり(人は文なりという入意)	「……」	書は書、きほんて	一度は……一度は……一度は……	行く所の流れは絶えずして……	本意取り	(例文模写)

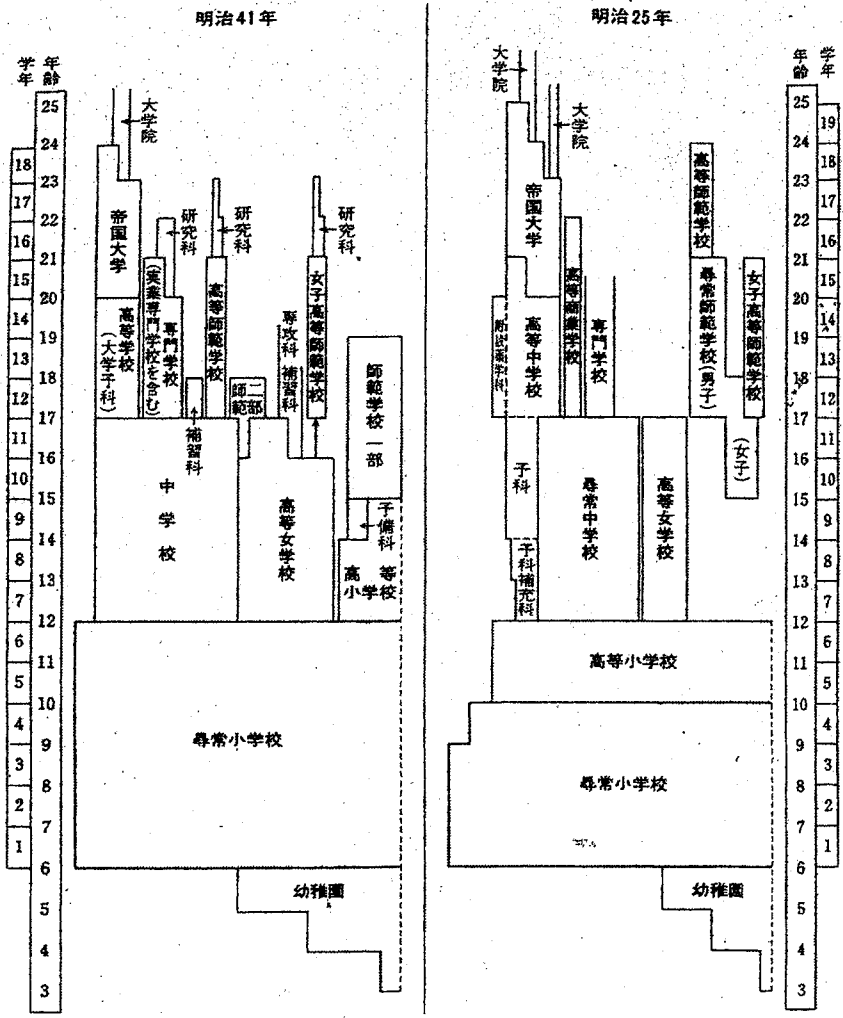
学校の授業が始まるにはまだ大分日数があるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよいという境遇にいた私は、当分の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変わりもしなかった。したがって一人ぼっちになった私は別に恰好な宿を探す面倒もたなかつたのである。

宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあつた。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇を一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそここにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い礁が返つた藁藁の間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に来た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあつた。その中に知った人をもたない私も、こういう賑(にぎ)やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寝そべつてみたり、膝頭を波に打たれてそこいらを眺ね廻るのは愉快であつた。

私は実に先生をこの雑沓の間に見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私はふとした機会からその一軒の方に行き慣れていた。長谷辺に大きな別荘を構えている人と違つて、各自に専有の着換場を拵(こしら)へていた。ここの避暑客には、ぜひともこうした共同着換所といった風なものが必要なのであつた。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外(ほか)に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹(しほ)はよい身体を清めたり、こゝへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へはいるたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしていた。

学校系統図



文部省『学制百年史』より

「こころ」年表1 「先生」

*「先生」の年齢は、一応明治45年当時37歳と仮定。

明治26年(18歳) 両親が病死。

明治27年(19歳) 秋、東京の高等学校に進学。

明治28年(20歳) 夏に帰省すると叔父が結婚を勧める。

明治29年(21歳) 夏帰省。叔父が従妹との結婚を強要。断わる。

明治30年(22歳) 叔父が遺産を横領していたのを知り、残った遺産を換金して故郷を捨てて上京。大学に進学し、軍人の遺族の下宿に移る。この夏、Kは実家から勘当。

明治31年(23歳) この年の暮れか翌年のはじめ頃に、Kを下宿に引き取る。

明治32年(24歳) 夏にKと房州旅行へ出る。

明治33年(25歳) 二月の中旬頃Kが自殺。六月に大学を卒業。暮れに静と結婚。二、三年後に静の母「奥さん」死去。

明治41年(33歳) 高等学校生の「私」と鎌倉で知り合う。

明治45年(37歳) 夏、自決の決意をする。

「こころ」年表2 「K」

*明治33年の正月からKの自殺までの推移。

歌留多取りをする。

一月三日前後 「奥さん」と静は市ヶ谷の親類へ年始に行く。Kは静への思いを「先生」に告白する。夜、「先生」はKに声をかけるがKは生返事ししない。そのまま日が経つ。

大学が始まる。「先生」は突然路上でKに「肉薄」する。

図書館でKに声をかけられ、上野まで歩く。「先生」はKに恋を断念させようとす。Kは「覚悟ならぬことでもない」と言う。その晩Kに呼び起こされる。

「先生」はKを出し抜いて奥さんから静との結婚の承諾を得る。

奥さんはKに婚約を話す。

「先生」は奥さんから、Kに婚約の話をしたことを聞く。その晩にKは自殺。